

変わりゆくブランウェル・ブロンテ像をめぐって

小田夕香理*

The Changing Image of Branwell Brontë

Yukari Oda

Branwell Brontë, the only son of the Brontë family, has often been described in the Brontë biographies as a drunken social outcast. However, in the last twenty years, researchers have found out that Branwell's image as a failure has been exaggerated to a great extent to illuminate his three sisters' diligence and glory. They also have attempted to re-evaluate his writings and artistic productions in a fair manner. Thus, the image of Branwell has recently been dramatically changed. In this paper, I will examine the changing image of the only son of the Brontës and consider how it affects the biographical aspects of the Brontës. The relationship between Charlotte, the eldest of the four siblings, and Branwell will also be re-considered.

Keywords: ブロンテ ブランウェル シャーロット Brontë Branwell Charlotte

1. はじめに

ハワースという小さな村の牧師館で、荒野を背に質素な生活を送ったシャーロット(Charlotte Brontë, 1816-55)、エミリ (Emily Brontë, 1818-48)、アン (Anne Brontë, 1820-49) のブロンテ三姉妹が、それぞれ世間を驚かせるような情熱的な作品を残したインパクトは大きく、彼女たちの人生の中にその起源を探そうとする人は後を絶たない。現在もなお、ブロンテ家の伝記には毎年のように新作が登場し、新たな見解をもった「ブロンテ姉妹像」が生み出されている。しかし、このような状況にあっても、ブロンテ家の一人息子であったブランウェル (Branwell Brontë, 1817-48) には、1994年にジュリエット・バーカー (Juliet Barker) が『ブロンテ家の人々』(*The Brontës*, 1994) を出版するまで、ほとんど光が当てられることはなかった。ブロンテ家に関する初の本格的な伝記作品、『シャーロット・ブロンテの生涯』(*The Life of Charlotte Brontë*, 1857) において、エリザベス・ギヤスケル (Elizabeth Gaskell, 1810-65) はブランウェルの落ちぶれた生活を伝えたシャーロットの書簡を多数引用し、詳細な調査をすることなく彼の零落ぶりを描いた。ギヤスケルは、『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847) によって作者のシャーロットに与えられた「品性に欠ける」という汚名をそそぐために「女性らしい」シャーロット像を描き出そうとし、その副産物として、シャーロットとは対照的な、一家の厄介者としての「ブランウェル像」

* 産業ビジネス学科

を生み出すことになったのである。以降、ギヤスケルの「ブランウェル像」はブロンテ家に関するほとんどの伝記作品において継承されていった。ブランウェルの友人であったフランシス・レイランド (Francis Leyland) が書いた伝記など、ギヤスケルが示した「ブランウェル像」に異議を唱えるブロンテ家の伝記作品も存在するが、それらのほとんどは論拠に欠けており、ギヤスケルの「ブランウェル像」を脅かすことはなかった。ゆえに、一般的には、「ブロンテ家の一人息子として一家の期待を背負い、人一倍強い文学的・芸術的野心をもちながらも成功を収めることはできず、仕事を転々とし、人妻との恋にやぶれて酒とアヘンに溺れて死んでいった放蕩息子」というブランウェルの「虚像」が定着したのである。

しかし、この落伍者としての「ブランウェル像」も、バーカーの『ブロンテ家の人々』の登場とともに変化しはじめた。バーカーは、‘Branwell is a selfish braggart, subordinating his sisters’ lives to his own by right of his masculinity, and negating the value of this sacrifice by squandering his talent and the family’s money on drink and drugs’ と述べて彼が不誠実に描かれてきたことを指摘した。そして、膨大な資料を綿密に調査し、客観的に分析することで、ギヤスケルを筆頭に過去の伝記作家たちが作り上げたブロンテ家にまつわる虚構を見直し、より「実像」に近いブロンテ家の姿を描き出したのである。バーカーは、父親のパトリック (Patrick Brontë, 1777-1861) についてと同様、ブランウェルについても見直すべき時期が「とっくに過ぎている」ことを指摘し、「ブランウェル像」の再構築の必要性を訴えたのである。¹

また、バーカーは、ブランウェルの詩を多数引用してブロンテ家の子供たちの創作活動を指揮するリーダーとしての彼の姿を浮き彫りにしただけでなく、ギヤスケルが取り上げた、彼のロイヤル・アカデミーでの失敗や鉄道事務員としての過失、ロビンソン夫人との密通など、ブランウェルの放埒な生活ぶりを印象づけてきたエピソードを再検証し、彼に必要以上に墮落したイメージが植え付けられていたことを実証した。最終章において、バーカーは、ギヤスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』で描かれたブランウェル像について、‘Similarly, the Branwell who was his family’s pride and joy, the leader and innovator, artist, poet, musician and writer, is barely touched upon, despite the fact that without him, there would probably have been no Curren, Eliis or Acton Bell’ と述べている。² ギヤスケルが書いた伝記がブランウェルの才能に触れていないことをバーカーは改めて指摘し、彼らが互いの協力のもとに独創力を発揮したこと、つまりブランウェルを含め、きょうだい一組で文学的な努力を続けていたことこそがブロンテ姉妹の小説の誕生をもたらしたのだと結論づけたのである。これまでに知られていた落伍者としてのブランウェルの人生にも多くの真実が含まれていることは否めない。しかし、バーカーによる伝記は、彼の詩人や画家としての才能にも注目することで従来の「ブランウェル像」に新しい側面を与えた。1990年代には、バーカーが『ブロンテ家の人々』を発表しただけでなく、トム・

ウィニフリ思 (Tom Winnifrith) やヴィクター・A・ノイフェルト (Victor A. Neufeldt) がブランウエルの詩を再編纂し、詳細な注釈をつけて出版した。また、ロバート・G・コリンズ (Robert G. Collins) によるブランウエルの2つのアングリア (Angria) 物語も出版されている。「ブランウエル像」は、ブランウエルの死後 150 年の時を経て、ようやく人生と作品の両側面から光を当てられるようになったのである。本論では、「ブランウエル像」がどのように変化しつつあるのかを考察し、ブロンテ家のなかで彼がどのような存在であったのかをもう一度考えてみたい。

2. シャーロットによるブランウエル隠しの可能性

ギヤスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』が「墮落したブランウエル像」を定着させるきっかけとなったことはすでに述べたが、ブロンテ姉妹を初めて世間に紹介した伝記的記述ということになると、それは他でもないシャーロットが 1850 年にエミリの『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847) と『アグネス・グレイ』(*Agnes Grey*, 1847) の第二版の出版時につけ加えた「伝記的紹介文」(‘Biographical Notice of Ellis and Acton Bell’)ということになる。シャーロットは、この「伝記的紹介文」と『嵐が丘』を解説した「まえがき」(‘Editor’s Preface to the New Edition’)、そして姉妹の詩に付した「覚書」(Prefatory Note to ‘Selections from Poems by Ellis Bell’)によって、彼女たちがどのような生活を送り、どのようにして小説の出版に至ったのかを説明し、姉妹の作品を「粗野」で「不道德」だと批判した批評家たちに対して作品内容の正当化を図った。

「伝記的紹介文」の中で、シャーロットは彼女たちが幼少の頃から書きものに勤むようになった理由を次のように説明している。

Resident in a remote district where education had made little progress, and where, consequently, where was no inducement to seek social intercourse beyond our own domestic circle, we were wholly dependent on ourselves and each other, on books and study, for the enjoyments and occupations of life. The highest stimulus, as well as the liveliest pleasure we had known from childhood upwards, lay in attempts at literary composition; formerly we used to show each other what we wrote, but of late years this habit of communication and consultation had been discontinued; hence it ensued, that we were mutually ignorant of the progress we might respectively have made.³

シャーロットは、イングランド北西部に位置するハワースという寒村での生活が幼少時代の彼女たちにとっていかに寂しいものであったのかを説明し、姉妹がともに勤しんだ文学的な創作活動こそが彼女たちにとって最も大きな喜びであったことを伝えている。シャーロットは続けて ‘We had very early cherished the dream of one day becoming authors’⁴とも述べており、互いの創作で知的好奇心を満足させる生活の中で、彼女たち姉妹が自然に作家となる日を夢見るようになったことを説明している。

しかし、この描写には、本来ならばそこで中心的な役割を担っていたはずの人物が存在しない。ブランウェルの存在が全く描かれていないのである。無論、この時点では、彼女たちに兄弟が存在することは世間に知らされておらず、この「伝記的紹介文」が姉妹の小説に向けられた批評に対抗するという目的で書かれたことを考えれば、説明すべきなのはシャーロット自身を含む三姉妹のことであって、むしろ関わりのないブランウェルに言及する方が不自然であるとも考えられる。しかし、シャーロット自身の視点に立って考えてみると、このような子供時代の描写をするにあたって、彼女が思い起こした風景にブランウェルが存在しないというのは想像し難い。彼女たちが幼少時代から作家になろうという夢を抱いていたことを語るとき、エミリやアンよりも積極的にその夢を実現させようとしていたブランウェルのことを、たとえ彼の晩年が語るにふさわしいものではなかったとしても、シャーロットが全く思い浮かべなかったとは考えられないのである。シャーロットが描くこれらの風景には、テキストの表面には現れてこないブランウェルの姿が潜んでいるのではなかろうか。シャーロットが用いた「わたしたちは」という意味の ‘we’ や「わたしたち自身」を意味する ‘ourselves’ という言葉は、読者には彼女たち三姉妹を指すものとして受け取られ、シャーロット自身もそれを意図したはずである。しかし、これらの代名詞を書き記すときに彼女の脳裏に映し出されていたのは、三人の姉妹ではなく、四人のきょうだいを書きものに精を出す姿であったのではなかろうか。シャーロットは四人のきょうだいを思い浮かべながらも、その中からブランウェルの姿を意図的に排除して書くという行為を行ったのである。シャーロットは、ブランウェルの存在を、決してテキストの表面には現れない、人から見えない位置に隠した。シャーロットは他の伝記作家たちのように彼の「虚像」を描き出すことはなかったが、その代わりに彼を全く描かないことを選び、「目に見えないブランウェル像」を生み出したのである。バーカーは、『ブロンテ家の人々』の中で、勤勉で忍耐強いシャーロットが墮落したブランウェルに対して嫌悪感を抱いていたことを繰り返し述べているが、シャーロットがブランウェルを読者から隠したことには、彼について読者に説明する必要がなかったことに加え、一家の

厄介者であった弟の存在を世間に知られたくなかった彼女自身の心理が関係していると考えられるのである。

3. 「ピラー・ポートレート」

「目に見えないブランウェル像」から連想されるもう一つの「ブランウェル像」がある。それは、「ピラー・ポートレート」(‘Pillar Portrait’)とも呼ばれる、ブランウェルが描いた肖像画『ブロンテ三姉妹』(*The Brontë Sisters*, 1834)の中の「ブランウェル像」である。この肖像画は、現在はロンドンのナショナル・ポートレート・ギャラリー (National Portrait Gallery) に展示されており、ブランウェルが彼自身を含めた4人きょうだいの肖像画を描きながらも、自分の肖像の出来が気に入らずに、あるいは勤勉な姉妹に対する劣等感を感じて、三姉妹を残して自分の肖像のみを塗りつぶしたという逸話とともに紹介されることが多い。経年による顔料の劣化によって、塗りつぶされたブランウェルの肖像のシルエットは徐々に透けて見えるようになり、『ブロンテ三姉妹』は、この塗りつぶしの部分「ピラー」の存在ゆえに「ピラー・ポートレート」と呼ばれるようになった。ジェイン・セラーズ (Jane Sellars) が、‘They are no longer just the work of the artist’s hand and eye. Instead, through the interpretations of legions of biographers from Gaskell onwards, they have become complex symbols of the sisters’ lives and achievements’⁵と述べて、「ピラー・ポートレート」を含むブロンテ家の肖像画は単なる絵ではなく、彼らきょうだいの人生と功績の凝縮であると指摘しているように、この絵は作家として成功を収めた姉妹と墮落したブランウェルという光と影をなす関係の象徴として取り上げられることも多い。しかし、ブランウェルの詩と人生に新しい側面が見出されつつある昨今、この「ピラー・ポートレート」にも新しい解釈が浮上しているのである。

ギヤスケルは、1853年にシャーロットを訪ねてハワースの牧師館に滞在した際、「ピラー・ポートレート」を見る機会を得た。彼女はその絵の印象を友人宛の手紙に次のように記している。‘One day, Miss Brontë brought down a rough, common-looking oil-painting, done by her brother, of herself, —a little, rather prim-looking girl of eighteen, —and the two other sisters, girls of 16 and 14, with cropped hair, and sad, dreamy-looking eyes’.⁶ ギヤスケルがこの肖像画を‘common-looking’と表現し、そこに描かれたシャーロットとすでに他界した彼女の姉妹の肖像の特徴を簡潔に伝えるに留めていることは、彼女がこの絵に特別な印象を抱かなかったことを示している。徐々に色あせていったピラーの下にブランウェルの肖像があることが発見されたのは1957年のことであり、ギヤスケルがこの絵を見たときには、ブランウェルの自画像

はずっかり塗りつぶされた状態にあった。ギヤスケルは、ブランウェルの肖像が隠れていることを知らずに、有名になった三姉妹の肖像画であるという以外特筆すべきところのない絵としてこの「ピラー・ポートレート」を見たのであろう。

しかし、重要なのは、ギヤスケルが塗りつぶされた「ブランウェル像」の存在を知っていたか否かではない。シャーロットがギヤスケルに見せるためになぜ「ピラー・ポートレート」を選んだかである。当時、ブロンテ家には、この肖像画に加え、「ガン・グループ」(‘Gun Group Portrait’) と呼ばれる、銃を手にしたブランウェルを三姉妹が囲んだ、きょうだい四人の肖像画も存在した。しかし、シャーロットがギヤスケルに見せることを選んだのは、この「ガン・グループ」ではなく、三人の姉妹だけが描かれていた、あるいは描かれているように見えた、「ピラー・ポートレート」だったのである。クリストファー・ヘイウッド (Christopher Heywood) は、これをシャーロットによるブランウェル隠しの一端であると見ている。

Perhaps most substantially, the column is undermined by the conflicting theories that have been formed in its support. In contrast, the motive, the inexperienced handling of oil paints, and the circumstances of the first viewing of the picture, all point to Charlotte as the unskilled painter who effaced Branwell’s features from the image of the Brontë family that she strove to present to her biographer and the public.⁷

ヘイウッドは、ブランウェルの自画像を塗りつぶしたのも、ギヤスケルに家族の厄介者であった弟の姿を晒したくなかったシャーロットの仕業だったのではないかと推測する。ブランウェルという弟が存在した事実は隠せないとしても、彼の肖像を見せずにおくことで、シャーロットは彼のイメージがギヤスケルの中で具体化されるのを避け、彼女からブランウェルについてあまり質問されずに済むよう心を砕いたのではなかろうか。事実、1850年に出版社からの姉妹の肖像画がないかという問い合わせを受けた際、シャーロットは ‘I grieve to say that I possess no portrait of either of my sisters’ と返答して肖像画の貸し出しを拒否している。⁸これは、シャーロットが彼女たち姉妹の姿が世間の好奇の目にさらされないよう骨を折った様子を伝えるものであるとも理解できるが、ヘイウッドは、シャーロットが彼女たち姉妹と一緒に描かれたブランウェルの肖像を人に見られなくなかったために肖像画の存在を否定したのではないかと推測している。⁹ヘイウッドは、ブランウェルが実際にピラーを描いたことを示す資料がないこと、きょうだいの肖

像画が描かれた時期とピラーが描かれた時期が必ずしも同じである必要はなく、同じであるという証拠もないこと、時間が経つにつれて色あせるような顔料の使い方が肖像画家としての修行を積んだブランウェルの仕事としては不自然であることも指摘している。そして、ギヤスケルにブランウェルの肖像を見られなくなかったシャーロットが、ギヤスケルの訪問の前に乏しい油彩画の知識をもって慌てて彼の肖像を塗りつぶした可能性を、ヘイウッドは結論として提示するのである。

4. シャーロットとブランウェルの確執

ヘイウッドが指摘する内容が事実であったとすれば、シャーロットは「伝記的紹介文」においてブランウェルをテキストの表面には現れないところに隠してしまったのと同様、四人のきょうだいが描かれた肖像画からブランウェルの存在を取り除くために彼の肖像のみを塗りつぶし、文字通り「目に見えないブランウェル像」を生み出したことになる。ヘイウッドの議論は多くの推測の上に成り立つものではあるが、ブランウェルが受けた肖像画家としての訓練の成果と彼の才能を評価して「ピラー・ポートレート」に新しい解釈を加えており、落伍者の烙印を押された「ブランウェル像」を覆すものである。また、バーカーの『ブロンテ家の人々』以来クローズアップされつつある、彼女の作家としての成功に影を落としかねない彼の生活ぶりに対する嫌悪をより鮮明に描き出すものでもある。

シャーロットとブランウェルの関係をもう少し見てみよう。「伝記的紹介文」の中で、シャーロットは、アンが『ワイルドフェル・ホールの住人』(*The Tenant of Wildfell Hall*, 1848)で主人公の夫ハンティンドンの墮落した生活ぶりを赤裸々に描いて非難されたことを受け、アンが描いたのは彼女が生前知っていた人物についての真実であるに過ぎず、彼女自身には非はないのだといって妹とその作品を弁護している。アンが「生前知っていた人物」とはブランウェルその人に他ならないが、シャーロットはその人物とアンを次のように説明している。

She had, in the course of her life, been called on to contemplate, near at hand and for a long time, the terrible effects of talents misused and faculties abused; hers was naturally a sensitive, reserved, and dejected nature; what she saw sank very deeply into her mind; it did her harm.¹⁰

子供時代の創作風景を描く際に、シャーロットがブランウェルを「見えない」存在にしてテクス

トの奥に隠したことはすでに述べた。しかし、アンを弁護する段になると、シャーロットは「才能が悪用され、能力が乱用された」有害な人物として密かに彼を登場させているのである。アンが彼のことを「一生の間、近くで、しかも長い間」「見つめていなければならなかった」と述べる部分は、その人物がアンの近親者であった可能性を示唆してはいるが、シャーロットは決して多くを語ろうとはせず、アンの控えめな性質の方に読者の注意を向けようとしている。ここには、出来ることならブランウェルの存在には触れたくはなかったものの、アンとその作品を弁護するためにやむを得ず彼の存在に言及しなければならなかったシャーロットの苛立ちと、ブランウェルへの嫌悪が表されているのではなかろうか。シャーロットにとって、ブランウェルがこの描写が示すような「害を与える」人物でしかなかったのであれば、彼女が「実像」としてはおろか、「虚像」としてすらも彼の存在を世間に知らせようとしなかったことに不思議はない。

先に言及したセラーズの論文は、「ピラー・ポートレート」の塗りつぶしがブランウェル本人によるものであるという前提のもとに、ヘイウッドとは別の視点からこの肖像画と「ガン・グループ」を分析している。セラーズは、ブロンテ家の一人息子であったブランウェルには男性としてのプライドと主導権への強い欲求があり、彼が三姉妹の存在感に圧された印象を与える「ピラー・ポートレート」の出来が気に入らずに自分の肖像を塗りつぶしてしまったのではないかと推測する。そして、「ガン・グループ」に描かれた彼の肖像が塗りつぶしを免れたのは、彼が姉妹を主導するように彼女たちを上から見下ろす構図にブランウェルが満足感を得たからであると主張するのである。また、セラーズは、当時の成功した肖像画家たちが自身の肖像を中心に据えた絵を発表して画家としての成功を顕示した例を挙げ、同じく肖像画家への道を歩んでいたブランウェルがそれらの絵から自分自身を中心に肖像画を描くという構想を得た可能性も指摘している。¹¹ヘイウッドの分析が導き出したのが放蕩生活を送るブランウェルに対する勤勉な長姉シャーロットの嫌悪であるのに対し、セラーズは姉妹を主導する存在でありたいというブランウェルの男兄弟としての自尊心と欲求、画家としての素養を浮かび上がらせており、二人の主張は全く別のものであるように見える。しかし、ヘイウッドとセラーズの考察が真実であるかどうかについては議論の余地があるとしても、ブランウェルの画家としての成果が確実に評価されるようになっているということ、そして「ブランウェル像」が変化しはじめれば「ブロンテ姉妹像」も変化するということを二人の研究が示していることに間違いはない。変わりつつある「ブランウェル像」は、ブランウェル本人の業績に対してより公正な評価を与えるとともに、より真実に近い「ブロンテ姉妹像」を照らし出す可能性を秘めているのである。

4. 結び

伝記の中のブランウェル像は、三姉妹とあらゆる対照をなして描かれてきた。厳しい環境の中で忍耐強さをもって文学界で名前を残した三姉妹に対し、強い文学的野心をもちながらも自活することすらできなかったブランウェルは、三姉妹の生活に焦点が当てられてきた従来のブロンテ家の伝記において、自らの敗北をもって彼女たちの成功を照らし出すという役目を担ってきたのである。悲劇性に満ちたブロンテ姉妹の人生とその作品が強く結びついて生まれた「ブロンテ神話」が人々を魅了するようになった過程には、「放蕩者のブランウェル」の存在もまた不可欠な要素であった。ゆえに、ブランウェルが「虚像」であり続けねばならない時間も長く続いたのである。しかし、近年では、ブランウェルが自律心と忍耐力に欠けた若者であったのは確かであるとしても、詩人として、あるいは芸術家として身を立てようと懸命であった側面もまた姿を現しつつある。先述のセラーズやヘイウッドの論文を含め、英国版の『ブロンテ・スタディーズ』(*Brontë Studies*)には、三年連続で「ピラー・ポートレート」を再考しようとする論文が掲載されており、作家としてだけでなく、芸術家としてのブランウェルの業績にも関心が集まっている。墮落した「ブランウェル像」という「虚像」の上に「ブロンテ姉妹像」が成立していたとすれば、その「ブロンテ姉妹像」もまた「虚像」であったことになる。シャーロットの知られざる一面が明らかになりつつあるように、ブランウェルの「実像」に近づくことは、親密なきょうだい関係の中で創作活動を続けていたブロンテ三姉妹の「実像」に近づくことも意味する。勤勉な姉妹を引き立ててきた落伍者としての「ブランウェル像」は、今や才能ある悩める若者の像として生まれ変わらつつあり、「ブロンテ姉妹像」に新しい光を当てる役割を担っているのである。

*この論文は、日本ブロンテ協会 2011 年度大会シンポジウム「ブランウェル・ブロンテの詩を読む」(2011 年 10 月 15 日、熊本大学)において「ブランウェル・ブロンテ像を求めて」の表題で発題した内容に加筆・修正を施したものである。

*この研究は、平成 23 年度福井工業大学特別研究費の支援を受けた。記して謝意を表す。

注

1. Juliet Barker, *The Brontës* (London: Orion, 1994), p. xviii.
2. Barker, *The Brontës*, p. 830.
3. Charlotte Brontë, 'Biographical Notice of Ellis and Acton Bell', in Emily Brontë, *Wuthering Heights* (1847), ed. by Patsy Stoneman (Oxford: Oxford University Press, 2008), p. 318. 'Biographical Notice of Ellis and Acton Bell' からの引用にはすべてこの版

を用いた。

4. Brontë, 'Biographical Notice of Ellis and Acton Bell', p. 320.
5. Jane Sellars, 'Branwell Brontë's Family Portraits: Motives, Influences, and Legacy', *Brontë Studies*, 36:1(2011), p. 55.
6. Elizabeth Gaskell, *The Letters of Mrs. Gaskell*, ed. by J. A. V. Chapple and Arthur Pollard (Manchester: Manchester University Press, 1966), letter No. 167, p. 249.
7. Christopher Heywood, 'The Column in Branwell's 'Pillar Portrait'', *Brontë Studies*, 34:1(2009), p. 17.
8. Charlotte Brontë, *The Letters of Charlotte Brontë*, ed. By Margaret Smith, 3 vols. (Oxford: Oxford University Press, 2000), vol. 2, p. 479.
9. Heywood, 'The Column in Branwell's 'Pillar Portrait'', p. 14.
10. Brontë, 'Biographical Notice of Ellis and Acton Bell', p. 322.
11. Sellars, 'Branwell Brontë's Family Portraits: Motives, Influences, and Legacy', pp. 53-54.

参考文献

- Alexander, Christine and Jane Sellars, *The Art of the Brontës* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995)
- Barker, Juliet, *The Brontës* (1994) (London: Phoenix, 1999)
- Brontë, Charlotte, *The Letters of Charlotte Brontë*, ed. By Margaret Smith, 3 vols. (Oxford: Oxford University Press, 2000)
- Brontë, Emily, *Wuthering Heights* (1847), ed. by Patsy Stoneman (Oxford: Oxford University Press, 2008)
- Collins, Robert G. ed., *The Hand of the Arch-Sinner: Two Angrian Chronicles of Branwell Brontë* (Oxford: Clarendon Press, 1994)
- Fermi, Sarah, 'The Pillar Portrait' Reconsidered', *Brontë Studies*, 35:3 (2010), pp. 278-86.
- Gaskell, Elizabeth, *The Letters of Mrs. Gaskell*, ed. by J. A. V. Chapple and Arthur Pollard (Manchester: Manchester University Press, 1967)
- Gaskell, Elizabeth, *The Life of Charlotte Brontë* (1857), ed. by Angus Easson (Oxford: Oxford University Press, 2001)
- Heywood, Christopher, 'The Column in Branwell's 'Pillar' Portrait Group'', *Brontë Studies*, 34:1 (2009), pp. 1-19.
- Leyland, Francis A., *The Brontë Family: With Special Reference to Patrick Branwell Brontë* (1886) (Honolulu: University Press of the Pacific, 2005)
- Neufeldt. Victor A. ed., *The Poems of Patrick Branwell Brontë: a New Text and Commentary* (New York: Garland Publishing, 1990)

Neufeldt, Victor A. ed., *The Works of Patrick Branwell Brontë*, 3 vols. (New York: Garland Publishing, 1997-99)

Sellars, Jane, 'Branwell Brontë's Family Portraits: Motives, Influences, and Legacy', *Brontë Studies*, 36:1 (2011), pp. 44-56.

Winnifrith, Tom, ed., *The Poems of Patrick Branwell Brontë* (New York: New York University Press, 1983)

内田能嗣 (編著) 『ブロンテ姉妹の世界』 (京都: ミネルヴァ書房、2010)

(平成 24 年 3 月 31 日受理)